Title	朝鮮王族義和宮留学と福沢諭吉
Sub Title	Prince Uihwa's studies in the U.S.: the Prince of Korea and Fukuzawa Yukichi
Author	都倉, 武之(Tokura, Takeyuki)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	2005
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). No.22 (2005.) ,p.341- 354
JaLC DOI	
Abstract	<p>外務省外交史料館所蔵「韓国皇族義和宮及同国人李竣鏑等動静取調一件」と題する簿冊に、福沢諭吉書簡が二通収められている。そのうち一通は下書きも現存し、朝鮮国宮内府大臣宛書簡案文(一八九七〔明治三〇〕年五月二〇日付)として既に『福沢諭吉書簡集』第八巻に収められているが、もう一通は今回初めて紹介されるものである。これらの書簡は簿冊の表題にもある通り、朝鮮(九七年一〇月に大韓帝国と改称)の王族(同じく皇族と改称)「義和宮」の動静に関するものである。「義和宮」という人物の略歴を示せば左の通りである。一八七七年三月生まれ。高宗国王の第五子で、側室張氏を母とし、名を李綱という。九一年、義和君(日本では義和宮)に封じられ、一九〇〇年には義王(義親王)に昇封された。韓国併合後は、公族に列せられて「李爛公殿下」と称されたが、李太王が亡くなると、独立運動団体「大同団」の総裁に挙げられて密かに活動し、一九年一〇月上海臨時政府への参加を企てて満州安東で日本警察に拘束された(大同団事件)。三〇年六月には隠居させられ単に「李姻殿下」と呼ばれ、警察の監視下で生活したという。五五年八月、ソウルにおいて七十八歳で死去。生涯で十三男九女をもうけた。なお、上の兄が純宗として高宗の跡を継ぎ、子がなかったが、その後継者とされたのは李綱ではなく、弟の李根(英親王)であった。これは、青年期の素行に由来するとも宮中の勢力争いに由来するとも言われる。本稿では彼のことを「義和宮」と呼ぶこととしたい。福沢書簡は、二通とも九七年五月のものであるが、このとき義和宮は日本留学中であった。しかしそもそも同宮が日本に留学していた事実自体が欠落している歴史書も多く、複雑な政治状況の中で表舞台から追われていく義和宮の動向は、ほとんど明らかとなっていないのが現状である。福沢諭吉との関係も、十分な研究は行われていない。同宮が九五年一月に来日した時、福沢は、時あたかも李朝政府との契約によって</p>

	朝鮮人留学生を慶應義塾に多数受け入れていた。そのことが接点となって、同宮の世話にも手を貸すこととなり、のちには国王より同宮の監督を委託されることとなったものと思われ、それは同宮が米国に留学する九七年五月まで続いた。したがって、両者の関係を明らかにすることは、福沢の晩年における朝鮮問題への関与を明らかにする上で、重要な意味を持つものなのである。本稿は、義和宮の来日から米国留学に至る動きを可能な限り明らかにし、それらと福沢の関係について若干の考察を加えるものである。
Notes	福沢諭吉関係新資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20050000-0341

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

朝鮮王族義和宮留学と福沢諭吉

都 倉 武 之

一 はじめに

外務省外交史料館所蔵「韓国皇族義和宮及同国人李垞鎔等動静取調一件」と題する簿冊に、福沢諭吉書簡が二通収められている。そのうち一通は下書きも現存し、朝鮮国宮内府大臣宛書簡案文（一八九七〔明治三〇〕年五月二〇日付¹）として既に『福沢諭吉書簡集』第八巻に収められているが、もう一通は今初めて紹介されるものである³。

これらの書簡は簿冊の表題にもある通り、朝鮮（九七年一月）月に大韓帝国と改称²の王族（同じく皇族と改称）「義和宮」の動静に関するものである。

「義和宮」という人物の略歴を示せば左の通りである。

一八七七年三月生まれ。高宗国王の第五子で、側室張氏を母とし、名を李垞^{イカ}という。九一年、義和君（日本では義和宮）に封じられ、一九〇〇年には義王（義親王）に昇封された。韓国併合後は、公族に列せられて「李垞公殿下」と称されたが、李太王が亡くなると、独立運動団体「大同団」の総裁に挙げられて密かに活動し、一九年一〇月上海臨時政府への参加を企てて満州安東で日本警察に拘束された（大同団事件）。三〇年六月には隠居させられ単に「李垞殿下」と呼ばれ、警察の監視下で生活したという。五五年八月、ソウルにおいて七十八歳で死去。生涯で十三男九女をもうけた⁴。なお、上の兄が純宗として高宗の跡を継ぎ、子がなかったが、その後継

者とされたのは李峯ではなく、弟の李垠（英親王）であった。これは、青年期の素行に由来するとも宮中の勢力争いに由来するとも言われる。本稿では彼のことを「義和宮」と呼ぶこととしたい。

福沢書簡は、二通とも九七年五月のものであるが、このとき義和宮は日本留学中であつた。しかしそもそも同宮が日本に留学していた事実自体が欠落している歴史書も多く、複雑な政治状況の中で表舞台から追われていく義和宮の動向は、ほとんど明らかとなっていないのが現状である。

福沢諭吉との関係も、十分な研究は行われていない。同宮が九五年一月に来日した時、福沢は、時あたかも李朝政府との契約によつて朝鮮人留学生を慶應義塾に多数受け入れていた。そのことが接点となつて、同宮の世話にも手を貸すこととなり、のちには國王より同宮の監督を委託されることとなつたものと思われ、それは同宮が米國に留学する九七年五月まで続いた。したがつて、両者の関係を明らかにすることは、福沢の晩年における朝鮮問題への関与を明らかにする上で、重要な意味を持つものなのである。

本稿は、義和宮の来日から米國留学に至る動きを可能な限り明らかにし、それらと福沢の関係について若干の考察を加えるものである。

二 外務省に保管された福沢書簡

今回見出された福沢書簡は、一八九七年五月、義和宮が日本留学を中断して突然米國に留学した経緯に関係するものである。日本及び米國における義和宮の行動や、國王暗殺を企てたとして死刑判決をうけ、のち赦されて日本に留学し、さらに英國へ留学した李垠（高宗の父である大院君の孫）の行動に関する記録とあわせて保存されている。福沢と直接関係する書類は以下の順序で残された三通である（全文は本誌三二五頁以下に（ロ）（ハ）（イ）の順で掲載）。

（イ）一八九七年五月二十九日付 朝鮮国駐劄加藤弁理公使宛

大隈外務大臣書簡（半公信）

（ロ）同年五月二二日付 大隈外務大臣宛福沢諭吉書簡

（ハ）同年五月二〇日付 朝鮮国宮内大臣宛福沢諭吉書簡

時系列的には（ハ）が最初に位置するもので、これは九七年五月二〇日、福沢が朝鮮国宮内大臣に宛ててしたためた書簡である。この中で福沢はまず、九六（建陽元）年一月二八日付で朝鮮国宮内大臣李載冕が福沢に宛てた公文を全文引用し、「義和宮」殿下ノ修業及ヒ其経費等二閱スル一切監督ノ

事ヲ託サレタ」ことを確認する。国王の勅旨に基づくその委託を「一身ノ名譽トシテ特ニ之ヲ重ンジ、爾來微力ヲ尽シテ殿下ノ御為メヲ謀リ、内外表裡苟モ不利ナカランコトヲ思フテ、直接間接ニ御注意申上ケ、幸ニシテ何等ノ御不都合モナク、御修業モ次第二御上達」したのであるが、「本月中旬」すなわち九七年五月の中頃、「殿下ニハ米國へ御遊學」と伝聞し、「不審ニ堪ヘズ」「必ズ何かノ間違ナラン」と考えた。なぜなら、「日本ノ御修業ヲ廢シテ他國へ移転トアレバ、宮内府ヨリ一応ハ諭吉へ御照會、又特別ノ勅命モアル可キ筈」だからである。しかるに義和宮に拜謁して直接尋ねたところ、米國留學は事実であり、それは「勅教ヲ奉シテ」のものであった。そのことを書面にしよう求めたところ、義和宮が記したのが左の書面である。⁶⁾

依奉

勅教發行美國諒之如何

建陽二年五月十九日

義和君

九六年一月二八日付で福沢が奉じた勅旨と、いま義和宮が奉じた勅教は矛盾する。「前後ノ勅詔孰レガ是カ非カ。天ニ二日ナシ、地ニ二王ナシト云フ。大朝鮮国ニ二王ナクシテ、前

後ニ勅詔ノ相衝突スルモノアリ。」福沢はなおも語を重ね「諭吉ハ勅旨ノ名ニ欺カレタルモノナリ。愚弄セラレタルモノナリ」と迫る。

その上で、矛を収めてこう続ける。「抑モ一國ノ政務ハ多端ニシテ、時ニ或ハ行違ナキニ非ズ。時勢ノ変遷アリ、官吏ノ粗漏アリ。」しかし「天地ト共ニ無窮ナル国王陛下ノ勅ハ、山ヨリ重クシテ時勢ニ從テ変ス可キニ非ズ。」

そこで求めるのは李朝政府において「其責任ノ所在ヲ詳ニシテ之ヲ披露シ、以テ諭吉ノ俯仰愧ルナキノ誠ヲ、日本朝鮮ハ勿論、広ク世界ノ耳目ニ明ニスルノ一事ノミ」というのである。

福沢はこの書簡を直接朝鮮宮内府に郵送したものとと思われる。⁷⁾しかし、この郵送一通だけでは心許ないと考え、さらにしたためたのが(ロ)の福沢書簡ということになる。

外務省に提出されたと考えられる(ロ)書簡で福沢は、朝鮮宮内大臣に宛てて(ハ)書簡を既に「郵便ヲ以テ一本通送」したことを述べた上で、「彼ノ国情トシテ達否ノ懸念不尠候」とし、在朝鮮日本公使館を通じて、同文の書簡を「御転達被成下」たいと依頼、その上で「何分ノ答書ヲ得度」としている。そのために(ハ)書簡が改めて二通作成され、「正副二通」として同封されたわけである。

(ロ)書簡を受領した外務省が朝鮮国駐劄加藤弁理公使に

宛てた書簡（半公信）が（イ）となる。書簡は、福沢が義和宮の修業につき朝鮮国王から委託された経緯を述べた上で「本月二十二日ニ到リ突然同殿下ニハ本邦出發渡米」となつたが、そのことについて福沢に対し「是迄ノ行懸上同国宮内府ヨリ一応ノ挨拶可有之ハ当然ノコトナルニ、何等挨拶モ無之」と説明して、既にこの件について説明を求めた書簡を福沢が宮内大臣に送っているが、福沢の書簡にもあるように「同国ノ国情トシテ違否ノ懸念モ有之」、「転達」の上「何分ノ答書」を求めてくれるよう依頼があつたので、「可然御取計相成度」と伝えている。

ここまでは福沢の書簡通りであるが、これに加えて次のように続く。右の次第は「表面上ノ義」であり、「内実ハ、福沢氏ニ於テモ、義和宮今度渡米ニ関スル事情承知致居候次第」であるから、福沢書簡を宮内大臣へ転達の際、「貴官（加藤公使）ノ意見」として「同大臣ヨリ福沢氏へ、義和宮殿下ノ修業上其他一切ノ監督方ニ関シ、是迄一方ナラズ御配慮ニ預リ居候事ユヘ、同殿下ノ今回渡米相成候義ニ付テハ、前以テ通知可致答ノ処、事情切迫彼是取紛レ、挨拶延引ノ段不悪了承相成度トイフ意味ノ言訳ヲ書簡ニテ申送」るよう「勧告」したらどうか、貴意を得たいのである。

「韓国皇族義和宮及同国人李峻鎔等動靜取調一件」に収録された福沢と義和宮の關係を示す資料は以上の三通で終わっ

ている。これ以上の往復や「答書」があつた形跡はない。福沢はこの時期の朝鮮關係の書簡や文書をまとめて保管していたようであるが、その中にも答書やこの件に関する書類は残されておらず、管見の限り李朝政府側にも残されていない。したがつて、この件について、朝鮮国宮内府から福沢に宛てて何らかの回答があつた可能性は低いものと思われる。

福沢がこれほど強く朝鮮側の対応に不信感を抱き、また答書を確認に得ようとしたことは、それまでの長い朝鮮問題との關係に由来する。中でも不信感が形成される一番の要因となつたのは金銭問題における信賴關係の喪失にあつたといえよう。当時福沢の朝鮮に関する貸金は相当かさんでいた。

たとえば、一八八四年の甲申事変以前、李朝政府の閣員たる金玉均に対して福沢が貸した金銭は総額一万五六七円六〇錢にのぼっていたが、事変により金玉均は日本に亡命し、一円も返還することがないまま、九四年四月に暗殺されてしまった。「逆賊」の借金として李朝政府は当初全く掛け合わず、ようやく利子を含めた二万円あまりが返還されたのは九五年一〇月のことであつた。⁸⁾ 日本亡命以後の金玉均への膨大な貸金は、当然福沢の元に戻らなかつた。⁹⁾

ほかにも兪吉濬、朴泳孝をはじめとする朝鮮政治家への様々な貸金、また乙未事変（閔妃暗殺事件）等で新たに亡命してきた朝鮮人に対する生活費の貸与もかさみ、返還の見通しは

皆無であるにもかかわらず、節約や返還に消極的な風であった。

また、九六年に李朝政府と慶應義塾との契約によって一〇〇名以上の官費留学生が来日したが、李朝政府からの学費・生活費等の諸経費支払いは滞っていた。さらに、一年も経たずに朝鮮の政変によって親露派が政府を占めると、右契約を一方的に破棄して留学生を召喚する動きを見せ、交渉相手とする李朝政府の立場が一定しない状態が続いていた。

そういった状況の中で留学生の一部が、留学費用を持ち出して米国に逃亡する事件や、慶應義塾会計局への侵入容疑で警察に連行されるといった事件まで起こったのである。¹⁰⁾

福沢のいらだちは、これらの事情が端的に示すように李朝政府及びその関係者の金銭問題を中心とした不誠実な対応に由来して生じた不信感を第一の原因とするのである。しかし一方で福沢は、留学生への資金援助や、亡命政治家の生活費提供も継続したのである。

三 義和宮の日本留学

前節に記した如く、(ロ)(ハ)の福沢書簡は、朝鮮問題で接した人々への金銭問題を中心とした長年のいらだちの鬱屈の上に記されたものと考えられ、そのいらだちがもはやこれ

までのように個人として李朝政府に掛け合うのでは時が明かないとの認識を生むレベルに達していたことを示している。加えて、この問題では、滞日中の義和宮の行動も不信感を上塗りしていた。以下に義和宮の来日から日本滞在中の動向について追ってみよう。

義和宮の来日経緯は必ずしも明らかではないが、確かなこととして来日時は一八九五年一月一日である。¹¹⁾

本来、日本への「特派大使」として来日することが決まったのは同年六月一九日であった。¹²⁾ところが、出発前の八月二三日になって、義和宮は国王に上疏して大使を辞職してしま¹³⁾う。

さらに、一〇月三日には英・仏・露・白・独・奥の各国への「報聘大使」に任命され、一〇月二三日に出発しそのまま三、四年は留学する予定となっていたが、十一月一八日にはこれを依願により解任されたと記録されている。¹⁴⁾

外部協弁(外務次官に相当)であった尹致昊の日記の一〇月二六日、二七日条には、そもそもこの大使派遣が、義和宮を東京に送るため、兪吉濬によって仕組まれたものであるという疑いについて言及されている。¹⁵⁾兪吉濬は、一〇月八日発生の乙未事変によって成立した親日派による第四次金弘集内閣に、内部大臣として入閣していた。朝鮮では親日派と親露派による激しい党派争いが繰り広げられており、彼が親露派

やロシア寄りの国王を牽制するカードとして義和宮を日本に置くこととしたことは十分考えられる。日本を經由して欧州へ向かう計画のところ、日本寄港のまま東京に留まらせ、大使の解任と日本留学を願い出させたものである。東京到着を新橋駅に出迎えたのは、慶應義塾に留学中の朝鮮人学生の代表であり、その三日後の一月四日には、福沢が義和宮及びその随員尹致昨を自宅に招待した記録がある¹⁸。

このような経緯で日本留学が既成事実化された義和宮は、乙未事変後に発生した親露派による春生門事件（金弘集総理等の暗殺未遂事件）の混乱も手伝ってか本国からの留学費用送金が滞っていたと見られる。甲午改革に伴い席支部大臣（財務大臣に相当）の日本人顧問官として朝鮮に派遣された仁尾惟茂が同宮に資金を援助していたほか、部分的に福沢も援助していた形跡が見られる¹⁹。

一 二月初旬、同宮の希望により日本陸軍で「学業研究」を行う準備が整えられた²⁰。翌年一月から三田小山の土方伯別邸において専属の指導官による個人指導が行われるとの報道が見える。ところが二月初旬には、同宮が「元来冷症」で「何分御修業難相成候二付、当分休業相成度同殿下ノ御思召」として見合わされることとなってしまう²¹。

陸軍での学業研究が取りやめになった一方で、李朝政府から監督を依頼されたのが福沢であった。福沢が、朝鮮宮内大

臣より国王の勅旨として義和宮の監督役を依頼されたのは、この間の九六年一月二八日のことである。しかし義和宮自身は「近來米行之念禁す可らざる」状態で、米国行きは「勅命にて御差留」となっていたが、福沢の見るところ「止むを得ず此地へ御滞在」の様子であり、なお釈然としない風であった。「兎に角に宮之真意いよ／＼日本御留学に決するにあらざれば、何事にも着手すべからず」、「血氣之少年」のことであるから「激して却て誤るよりも」と、福沢は「穩便」に推移を見守るばかりであった²²。

さらに、義和宮は用意された宿所にほとんど帰宅せず酒色にふけり、突如朝鮮公使館へ宿所の移転を謀ったりと周囲を困惑させ、監督を委託された福沢も「老生一個ノ意ヲ以テ之ヲ制スルコト易カラズ」「鉄鎖以テ之ヲ縛シ、鉄鞭以テ之ヲ進退セシムルハ易シト雖モ、固ヨリ深宮貴公子ノ堪ル所ニ非ズ。左レバトテ之ヲ自由自在ニ任スレバ、次第二惡少年タル可キノミ」とその対応に頭を抱えていた。この頃同宮はひと月に二〇〇ドルあまりを費やしていた²³。それでも福沢は「殿下ノ徳望」が損なわれることを恐れてこの秘事を「秘中ノ秘」として誰にも語らず、旧知の兪吉濬にのみ相談し、「本国ヨリ誰レカ一名、身分重キ人ヲ派遣シ、共ニ謀ルコト」を希望すると書簡に記している²⁴。義和宮は随員尹致昨を忌避し、さらに彼を通して福沢が兪吉濬らに情報を流して

いることを嫌っていた様子である。間もなく義和宮の夜遊びは一段落したらしいが、散財は相変わらずであったようだ。²⁸⁾ 福沢家「金銭出入帳」の中で義和宮または随員の尹致昨の名が明記された項目を引用すれば左の通りである。

〔出の部〕

二八年 一月二一日 三〇〇〇円 義和君へ同断〔かし〕
 二九年 五月一〇日 一五円 同〔朝鮮人〕尹致昨へ
 六月三〇日 二〇円 同〔朝鮮人〕尹致昨へ
 八月 五日 三六錢二厘 尹出産に付送る
 一〇月三一日 二五円 朝鮮用尹致昨へ
 十一月三〇日 二〇円 尹致昨へ
 一二月初 五円 義和の爲め高橋へ渡す
 二月二七日 二〇円 尹致昨へ
 三〇年 一月二九日 二〇円 同断〔朝鮮人〕尹致昨へ
 三月 一日 一〇〇円 義和の爲めとて朴へ渡す
 二八年 一月 一〇〇円 附落過剰思出さず
 此百円は尹致昨の金を益田英次氏より届けた

るものを忘れたるものなり。後に思出して爰に記す。
 義和より
 二九年 一月三一日三〇七円六七錢
 三月二八日 九七円五〇錢 義和より三月三〇日までの利

支出は三二二五円余、収入は五〇五円余。差し引き二七二〇円の赤字となっており、福沢が義和宮に対しても多くの出費をしていたことがわかる。同時期にはそれ以外にも多くの資金を朝鮮人亡命者や留学生に提供していた。

四 義和宮の渡米経緯

日本滞在中の義和宮が、学問修業に専念した期間はかなり短かったようであるが、それは同宮の素行だけが理由ではなく、李朝政府の政情に由来する部分も大きい。李朝政府にとつて、義和宮が日本に留まることは二つの意味で不都合があった。まず、前述の通り、散財が甚だしいこと。今ひとつは、同宮が政治的に利用され高宗の王位を狙う謀議が起ることへの懸念が大きいことであった。彼が出国してから半年あまりの間に朝鮮国内の政治状況は

激変していた。親日派による乙未事変、親露派による二ヶ月後の春生門事件と、親日派と親露派の間で主導権を巡る攻防が続いていたが、国王の勅旨として福沢に義和宮監督が委託されてからわずか二週間後の一八九六年二月一日、露館播遷が発生している。親露派政治家とロシア公使の画策によって高宗及び王世子がロシア公使館に遷座し、親日派による金弘集内閣が瓦解、閣僚を逆賊とする勅旨が発せられて金弘集、魚允中、鄭秉夏などが民衆に惨殺された事件である。兪吉濬はあやうく難を逃れて日本に亡命し、義和宮の日本留学を指揮する人物が李朝政府に不在となっていた。国王父子の遷座は、「閣僚と日本政府が通謀して国王の廢位を画策している」との親露派の教唆によるものであったから、王子の日本留学が忌避されるようになっていたのは当然のことである。

李朝政府は九六年五月頃、義和宮に米國留学を促すため、米國人宣教師一名を日本に派遣する計画を進めていたらしい。そのことを聞いた福沢は「義和君王米國ニ誘出スルハ露人ノ秘計ニシテ、米國人ハ露人ノタメニ働クモノナリ」と李朝政府の内情を耳にしていた。同じく日本に滞在していた李俊鎔に対してはこの時、朝鮮帰国を促す計画であった。⁽²⁹⁾

しかし、その後李俊鎔だけでなく、義和宮にも帰国を求めることとなったらしく、福沢の手元には左の電報残りが残されている。⁽³⁰⁾

義和君此時不可在外而以債負滯留云汝須以報債之意担保于
福沢使之速々還國亦以電報示義和君回示

宮内府

六月二十日午後四時二十分

金銭の精算を済ませた上で速やかに帰国するよう求めた電報であるが、義和宮も李俊鎔もこれに従わなかった。⁽³¹⁾

以後の義和宮の動向についての新聞報道を拾ってみると、朝鮮人亡命者との交遊や、閩西方面、横浜への転居などが報じられている。⁽³²⁾ また、前頁に掲げた福沢家の帳簿において九六年一二月の条に「高橋」とあるが、これは北里柴三郎の経営する結核療養施設養生園の庶務主任高橋岩路のことである。彼は同年春頃から義和宮の身辺の世話について色々手配しており、高橋家の奥座敷に同宮をかくまっていた時期もあると伝えられている。⁽³³⁾ 李朝政府においては、敵対する党派の政治家に刺客を送って暗殺することが横行しており、義和宮も親日派の一味と見なされて危険にさらされていたということであろう。その後、義和宮自身の希望として三〇年一月から二月頃米國留学の噂が巷間に流れているが、三月には一端中止との報道がある。⁽³⁴⁾

李朝政府が義和宮に帰国を求めてから約一年、同宮を米國

に留学させようとの働きかけが再び動き始める。九七年四月、国王の密命を帯びた米国人宣教師アンダーウッド (Horace Grant Underwood 漢字名「元杜尤」) が翻訳官朴鎔奎とともに日本に密航したのである。国王の認識では、日本滞在中の義和宮は日本に亡命中の「朴泳孝俞吉潘ト親交アル」が、「未ダ弱年ニシテ思慮充分ナラザル為メ、或ハ如何ナル椿事ヲ惹起スヤモ難計、ステハ将来ノ為メ宜シカラストノ懸念」を持っていた。³⁵⁾ その懸念は非常に切迫したもので、同宮を米留学させることに急であり、同宮が「命ヲ奉セサルトキハ、位階ヲ褫奪ストノ恐喝」さえ用いたという。³⁶⁾

九七年五月二二日午後〇時二〇分、義和宮及び同行人朴鎔奎ほか二人を乗せた汽船コブチック号は横浜を出航、六月一六日にニューヨークに到着した。横浜出航には朴泳孝、李竣鎔のほか、二〇名以上が見送りに来ていたという。³⁷⁾ こうして義和宮は、国王の意向によって米国に身を移したのである。福沢はこの動向に対して、なすべがなかった。またしても借財だけが残った。すでに李朝政府内に頼るべき知人もない。こうして前述の書簡がしたためられることとなるのである。

五 むすび

以上において、義和宮の日本留学と福沢の関係、また米留学に至る経緯の概略を可能な限り明らかにした。同宮は乙未事変と露館播遷の激動の政治変動の中で翻弄され、最初は親日派による親露派牽制のために、次いで親露派による親日派封じ込めのために、それぞれ利用されたのである。義和宮自身はその政情を愉しまず、学業を修める気にならなかったために、放蕩と散財に走ったという側面もあったのかもしれない。

その後の義和宮の行動については、次の外務省訓令を示すに留めたい。³⁸⁾

明治三十二年一月廿六日発遣

機密送第六号

青木 外務大臣

在 韓

加 藤 全権公使 殿

韓国義和宮ハ予テ御悉皆之通り、過ル明治二十八年來朝以來、一時ハ専ラ修学致候コトモ有之趣ニ候得共、其後ハ何等ノ学業ニモ従事セス空シク消光致居、同三十年五月、同

国皇帝ノ特命ニ依リ更ニ米國へ留学セシモ、是亦何等學業ヲ修メタルコトモ不聞及、昨年五月ニ至リ再ヒ本邦へ帰着シ、其後ハ兎角遊惰ニ流レ、随テ負債等モ相嵩ミ候哉ニ相聞へ候。然ニ韓國皇族ニシテ態々本邦ニ渡來シナカラ何ノ得ル所モナク、却テ遊惰ノ為メ其身ヲ誤ラシメ候ハ、甚タ遺憾之至ニ存候間、本大臣ハ親シク同宮ニ会晤シ、曾テ其本國ヲ發シテヨリ今日ニ至ル迄或ハ本邦ニ或ハ米國ニ留学、殆ト四ヶ年ノ久敷ニ渉ルモ學業一モ就ラズ、此上尚ホ改悛奮勵スルナクムバ終ニ皇族ノ品位ヲモ傷クルニ至ルベク、斯クテハ同宮ハ勿論韓廷ノ為メ慨嘆ニ堪ヘザル次第ナレバ、宜シク速ニ昨非ヲ改メ熱心修業セラル、様致度旨懇々勸誘候処、同宮ニ於テモ大ニ悔悟スル所アリタルモノ、如ク、將來ハ一ニ本大臣ノ勸告ヲ恪守シ且ツ監督ヲ甘受シ、暫テ學業ニ勉勵可致ニ付、何分ノ助力ヲ請フ旨被相答候。依テ今後ハ本大臣ニ於テ適當ノ教師ヲ選択シ、終始同宮ノ傍ニ在リテ教諭訓戒セシメ、同時ニ本大臣自カラ之ヲ監督ノ任ニ當リ、折角本邦ニ留学相成タル丈ケノ効果ヲ取メシメ度考ニ有之候。然ニ從來帝國並ニ米國留学中動モスレバ本國ヨリ學資ノ送金遲延ニ涉リ、為メニ不尠借財モ有之候趣ニ付、今後ハ同宮ノ學資ヲ一ヶ年尠クモ金五千円ト確定シ、二ヶ月若クハ三ヶ月分宛前金ヲ以テ無遲滞送附相成候様致度候条、至急韓國皇帝へ謁見ノ上具サニ前陳之事情ヲ奏聞

セラレ、且ツ韓國政府トモ御協定相成度、若シ又韓皇並政府共本大臣ノ提議ヲ容ル、所存無之ニ於テハ、同宮ヲ本邦ニ滞在セシムルモ無益ニ有之候条、此段篤被御舍之上何分共剛情的ニ御談判相成度、且其結果ハ御報告有之度、此段申進候。敬具

右の如く、米國においても學業に専念できなかった義和宮は、渡米から一年後の九八年五月には再来日したのである。このうち、高宗皇帝の親政を非とする者たちによって義和宮を皇帝とする画策が起こったり、英親王を皇帝の後継者とすることを望む嚴妃（英親王の母）による義和宮帰國阻止運動などによって、自然日本に留められることとなり、また米國との往来も繰り返され、帰國が実現するのは一九〇六年四月初旬のことである。この帰國は、乙未事變に関係する日本亡命者らの帰國と併せて、日本政府が高宗皇帝に請うて実現したものであった。³⁹

十年を経てすっかり変貌を遂げた韓国皇室に放り込まれた同宮は、その地位に安んずることが出来なかつたと見え、日韓併合を経て独立運動に関与、再び波乱の道を歩むことになるのである。

老余を過ごす福沢にとって朝鮮問題は、甲申事變前後のよう

下に学んだ朝鮮の政治家たちの求めに応じる形で、受動的に関与するものであったといえよう。

しかし、こと義和宮の件に関しては、福沢がなお能動的に李朝政府に対して働きかけを行い、そのあり方を正そうとしていた啓蒙的姿勢がかいま見える。金銭問題といい、千変万化の政情といい、結局のところ福沢の眼には、朝鮮の不安定性の最重要要因として、宮中の政治性が映じたのであろう。

当時独裁的権力を握っていた高宗による「勢力均衡政策」は、その事大主義的で無原則な政治運営によって、王室、ひいては国家の尊厳を損ないかねないものであり、その問題点を福沢が直接的に問い糾す最後の機会となったのが、この義和宮を巡る書簡であったと考えられるのである。

義和宮や亡命朝鮮人と福沢の関係については、なお検討すべき課題が多く、引き続き調査の上、別稿を期したいと考えている。

注

- (1) 朝鮮は一八九六年一月から独自の元号を導入すると共に陽暦を採用した。それ以前は陰暦であり、開国〇年／高宗〇年／干支など、年数の表記法も複数存在した。そこで本稿では、本文中原則として西暦・陽暦を用い、註における史料の日時表記など必要に応じて両

国の元号その他の表記や陰暦月日を用いることとする。

- (2) 『福沢諭吉書簡集』第八卷（以下『書簡集八』と略記、岩波書店、二〇〇二年）、二九八―三〇〇頁。

- (3) これらの書簡は『日本外交文書』第三〇巻（日本国際連合協会、一九五四年）、三一二頁以下に収録されている。

- (4) 二〇〇五年、李王家の継承者・李玖が死去し直系が絶えた際、李珧の孫である李源が、その養子になって李家を継いだ。

- (5) 管見の限り、両者の関係を検討したものととして、富田正文「日清戦争直後の朝鮮亡命政客」（『福沢手帖』第六六号、平成二年六月）、『書簡集八』解題、三九八頁以下があるのみである。

- (6) この書面は現存し『福沢諭吉全集』第二二巻、三七六頁に収録されている。訳文は「勅教を奉ずるに依り美国に発行せんとす。之を諒とするや如何」。

- (7) 福沢が直接朝鮮に宛てた書簡はほとんど残存していないが、たとえば福沢の手に残った兪吉濬宛福沢諭吉書簡（明治二十九年二月四日付、『書簡集八』、一五一頁）の封筒などを見れば、通常の郵送手段を使って送付したものであろう。

- (8) 明治二十八年一〇月一八日付高見亀宛福沢諭吉書簡、

『書簡集八』、一〇七—一〇八頁。

(9) 金玉均は福沢以外にも相当な借金があったらしく、日本亡命中に三度の財産差し押さえにあったという。

『尹致昊日記3』(韓国国史編纂委員会、一九七四年)、一八九三年一〇月三〇日条(この日記は英文で記され、陽暦で表記されている)。

(10) 朴贊勝「一八九〇年代における官費留学生の渡日留学」『近代交流と相互認識Ⅰ』(慶應義塾大学出版会、二〇〇一年)七九、九五頁。

(11) 『時事新報』(明治二八年一月二日付)。陰暦では九月一五日に当たる。なお義和宮は日清戦争中の一八九四年一〇月、勅使西園寺公望の朝鮮訪問への答礼として、報聘大使に任じられて来日したことがある。その際の随員は兪吉濬であった。

(12) 「日省録」「高宗実録」、それぞれ高宗三二年五月二七日条(一八九五年六月一日、以下同)。

(13) 『承政院日記』「日省録」「高宗実録」、それぞれ高宗三二年七月四日条(同八月二三日)。

(14) 『承政院日記』「日省録」「高宗実録」、それぞれ高宗三二年八月二五日条(同一〇月一三日)。

(15) 『続陰晴史上』(韓国国史編纂委員会、一九六〇年)、海陽行遣日記・高宗三二年乙未九月六日条(同一〇月

二三日)。

(16) 『承政院日記』「高宗実録」、それぞれ高宗三二年一〇月二日条(同一一月一八日)。

(17) 『尹致昊日記4』(韓国国史編纂委員会、一九七五年)、一八九五年一〇月二六日条。仁尾惟茂も協力者であると示唆している。兪吉濬は大使出発後に「現在の危機」(乙未事変後の混乱の意か)が去らなければ大使派遣費用を支出できないといいたしたため、尹致昊はその確信を深めている。なお尹致昊は義和宮の随員に任命されているが、実際は随行しなかった。

(18) 前掲「一八九〇年代における官費留学生の渡日留学」、九五頁。明治二八年一月三日付大久保文輔宛福沢論吉書簡、『書簡集八』、一一〇—一一一頁。

(19) 前掲『尹致昊日記4』一八九五年一〇月二六日条に、仁尾が一三〇〇円を提供したとある。朝鮮政府からの費用は尹致昊が管理し、日本側との仲介は在日朝鮮公使館通訳官の山崎英夫が担当していた。山崎に費用の精算について問い合わせる福沢書簡が残されている(明治二八年二月二〇日付山崎英夫宛福沢論吉書簡、『書簡集八』、一二三頁以下)。

(20) 「義和官殿下学業研究の件」(『巷大日記』明治二八年一月二月、防衛庁防衛研究所蔵、以下同)。

- (21) 『読売新聞』(明治二十九年一月五日付)。
- (22) 「義和宮殿下修業当分休業の件」(『老日記』明治二十九年二月)。
- (23) 明治二十九年二月四日付兪吉潘宛福沢諭吉書簡(二〇一八号書簡)、『書簡集八』、一五〇頁以下。
- (24) 前掲『尹致昊日記4』、一八九六年二月五日条。
- (25) 明治二十九年二月四日付兪吉潘宛福沢諭吉書簡(二〇一九号書簡)、『書簡集八』、一五二頁以下。
- (26) 明治二十九年二月二六日付仁尾惟茂宛福沢諭吉書簡、『書簡集八』、一六〇頁。
- (27) 「金銭出入帳」『福沢諭吉全集』第二卷(岩波書店、一九六四年)、一五一頁以下。ただし、この帳簿は「明治三〇年五月」までのものであり、以後については記録がない。数字の表記等は、見やすいように改められている。
- (28) 明治二十九年五月七日付朴泳孝宛福沢諭吉書簡、『書簡集八』、一八八頁。
- (29) 同右。
- (30) 前掲『福沢諭吉全集』第二二卷、三七六頁に、明治三〇年六月二〇日の朝鮮宮内府電文写として収録されているものであるが、明治三〇年のものとする朝鮮政府が義和宮に米國留学を命じた後となり齟齬を生じ
- るから、明治二十九年とするのが妥当であろう。訳文は以下の通り。「義和君此の時に外に在る可らず。而して債負を以て滞留すと云ふ。汝須く報償の意を以て福沢に担保し、之をして速やかに國に還らしめよ。亦此の電を以て義和君に転示し回示せよ。」
- (31) 外部大臣李完用宛学部大臣申箕善照会(建陽元年六月二十八日付)。慶應義塾への官費留學生の内、学費支給を打ち切る予定の八三名と共に帰国する手はずが整えられていたが、留學生たちもこの時は帰国を拒否した。前掲「一八九〇年代における官費留學生の渡日留学」、八六頁。
- (32) 『読売新聞』(明治二十九年六月二十九日付、同年一〇月二四日付等)。
- (33) 明治二十九年三月一日付高橋若路宛福沢諭吉書簡、『書簡集八』、一六二頁。前掲「日清戦争直後の朝鮮亡命政客」、五頁。養生園は福沢の援助によって創立されており、朴泳孝も園内にかくまわれたことがある。
- (34) 『読売新聞』(明治三〇年一月二四日、三月一八日付)。
- (35) 明治三〇年五月二五日付、大隈外務大臣宛朝鮮國駐劄加藤弁理公使書簡、「韓國皇族義和宮及同國人李垓鎔等動靜取調一件」(外務省外交史料館所蔵、以下「取調一件」と略記)所収。

(36) 明治三〇年四月二〇日付大隈外務大臣宛朝鮮国駐劄加藤弁理公使電報、「取調一件」。

(37) 明治三〇年五月二二日付大隈外務大臣宛中野神奈川県知事公信、「取調一件」。これによれば朴泳孝は出航直前の義和宮と密談し、その結果義和宮は船室不潔として次の便船まで出発見送りを希望し、荷物積み出しを始めた。しかしここに朴鎔奎が来て適當の船室斡旋を申し出、朴泳孝と論談の後、宮を船内に連れ戻し、船長らとも協議の上船長室を準備、朴泳孝は不平の体で引き返したという。

(38) 明治三二年一月二六日付韓国駐劄加藤弁理公使宛青木外務大臣公信、「取調一件」。

(39) 明治三九年三月二二日付西園寺兼任外務大臣宛伊藤韓国統監公信、「取調一件」。